編 集 後 記

本号の誌面を御覧になっていかがであろうか。従前のものを御存知の方はずいぶん読みやすくなったとお感じただけるのではないだろうか。文字を大きくして、一頁当たりの字数も従来のものに比べると，４分の３に減り、約1,800字になった。

当都市研究センターでは，かねてよりこの『総合都市研究』を編集するに当たって一つの悩みをもっていた。それは、誌面の活字がいかにも小さいということである。活字を大きくして読みやすくしたいという内外からの要望があった。とくに、東京都庁の都民資料室で一般に販売されるようになってから，その声は一段と大きさを増したように思われた。編集委員会でもかなりまえに何とかしたいと考えて手をつくしたのであるが，活字を大きくするには，印刷予算が現行の５割増を強いられるとあってできなかった。各研究分野の予算を削ってもらって、誌面刷新をはかることも考えた。しかし，センター発足以来，現在で７年目になるけれども，その間研究費の一円の増額もないなかで，とても出来るものではない。それでなくとも物価上昇によって，実質研究費は発足当初の半分以下にレベルダウンしているからである。

学術雑誌だから，文字は小さくてもよいという声も無いわけではない。しかし，研究成果は多くの人々に読んでいただきたいし，沢山読まれることによって，また、研究者に与えられる刺激も大きくなるはずである。さらに高齢化社会に入るという時代的背景もある。現に新聞も文字を大きくした。誌面の文字を大きくするということは時代的要請ともいえる。

印刷具の技術革新は日進月歩である。「文選」「植字」などという言葉も死語になろうとしている。ワードプロセッサーとレーザー製版によって，誌面も自由自在になろうとしている。そんな技術に助けられて，当学術雑誌も，印刷予算の増大をあまり心配しないで，今回の誌面を作り出していただけた。皆さんに感謝するとともに，今後とも，編集上に限らず，論文そのものにたいしても，数多くの御意見等，編集委員会の方へお寄せいただきたく存じます。

（大石　堪山記）